

Human Rights

令和元年度

全国中学生
人権作文コンテスト

横浜市大会 作文集

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方務局

横浜市教育委員会

令和元年度

全国中学生人権作文コンテスト

横浜市大会作文集

はしがき

昭和二十三年（一九四八年）十二月十日に国際連合総会で世界人権宣言が採択されたことを記念して、毎年十二月四日から十日まで人権週間が設けられています。

これにあわせて、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会と横浜市教育委員会の共催で「全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会」を実施しています。

本コンテストは次代を担う中学生に、人権課題についての作文を書いてもらうことにより、人権尊重の重要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的としています。

本年度は、一三七校、五五、九一四編に及ぶ多数の作品が寄せられました。

コンテストに寄せられた応募作品はいずれも中学生らしいみずみずしい感性に富み、人権課題につい

て、自ら真剣に考えて意見を述べたものばかりで、応募された皆様の真摯な姿勢には心を打たれるものがあります。

この作文集は、校内審査を経た六八三編から、一次審査で六八編、二次審査で五十編を選考し、さらに最終審査で最優秀賞、優秀賞に選ばれた二二編を収録したものです。より多くの方々にお読みいただき、身近な生活の中で人権尊重の輪が広がることを願ってやみません。

終わりに、コンテストの実施にあたり多大な御尽力をいただきました、審査に関わられた先生及び多くの関係者の皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

令和元年（二〇一九年）十一月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

（横浜市・横浜人権擁護委員協議会・
横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局）

横浜市教育委員会

【審査講評】

第三十九回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会に、市内一三七校から五五、九一四編の作品を御応募いただき、ありがとうございます。また、参加された各校の先生方におかれましては、熱心に御指導いただき、また審査にあられましたことに厚く御礼申し上げます。

日ごろの自らの体験を通じて感じたこと、考えたことを人権の視点から見つめ直し、一つの作品としてまとめ上げた中学生の皆さんの意欲と努力に心から敬意を表します。

応募作品のテーマは、いじめなど子どもに関するもののほか、戦争や平和、障害者、環境問題、外国人など幅広い分野から寄せられました。また、今回は、オリンピック・パラリンピック競技大会や性的指向・性自認に関する課題といった、近年社会的に注目されている分野を取り扱った作品も数多くありました。

作品の多くは、家族や友人、地域の人との日常のふれあいを通じてのふとした気づきや心の動きを素直に表現しており、その感覚の鋭さに、はっとさせられる作品もありました。

中学生の皆さんが人権作文を書くことで培った「人権の視点」を、これからも永く持ち続けてくださ

ることを願っております。

横浜市大会においては、校内審査を経た作品について、市立中学校教育研究会国語科部会の先生方による一次審査、教育委員会事務局指導主事による二次審査を行い、最終審査で最優秀賞など各賞を決定いたしました。最優秀賞のうち、「病氣と人権」「見えないマークに目を向けて」「違いを認め合う平和な世界を目指す」「役に立つ喜び」「兄を通して学んだこと」「たすけ合うこと・支え合うこと」「『風評被害』から学んだこと」「思いやりのはね返し」を神奈川県大会の優秀賞として推薦いたしましたことを御報告申し上げます。

審査員の皆様には、御多忙の中、審査に御協力いただきましたことに改めて御礼申し上げます。

最後に、この作文集が、中学生のみならず、広く市民の皆様が人権について考えるきっかけとなれば幸いです。

審査委員長 小林 千恵子

(横浜人権擁護委員協議会会長)

目次

はしがき

審査講評

入選者紹介

最優秀賞

●横浜市長賞

病気と人権

横浜市立東山田中学校

三年

野田

千尋

7

●横浜市教育長賞

見えないマークに目を向けて

横浜市立南高等学校附属中学校

三年

森

彩夏

10

違いを認め合う平和な世界を目指す

横浜市立岩崎中学校

三年

渡部

晴

13

●横浜人権擁護委員協議会長賞

役に立つ喜び

横浜市立岡津中学校

一年

いっとう

の

16

兄を通して学んだこと

横浜市立南高等学校附属中学校

二年

坂口

優花

18

●横浜市人権擁護委員会長賞

たすけ合うこと・支え合うこと

横浜市立南希望が丘中学校……………

三年

松本陽茉莉

…
21

「風評被害」から学んだこと

横浜市立中山中学校……………

二年

加納麻美

…
23

思いやりのはね返り

横浜市立田奈中学校……………

一年

高橋麗子

…
25

●横浜DeNAベイスターズ賞

プラス^{いち}のすすめ

横浜市立希望が丘中学校……………

二年

栗田鈴菜

…
28

●横浜F・マリノス賞

発信する人

横浜市立鶴ヶ峯中学校……………

三年

森遥香

…
31

●横浜F C賞

「共に関わり合うために」

横浜市立神奈川中学校……………

二年

蜂巣ひなた

…
34

●横浜ビー・コルセアーズ賞

いじめをなくそう

横浜市立港南中学校……………

一年

黒瀬亮太

…
36

優秀賞

外国人だった私

言葉の杖

Change the world

認知症の方と接すること

子供が笑顔でくらせる社会

つなげよう、五輪の輪。

一人の人間

人の心

障害者の気持ち

災害とプライバシー

横浜市立田奈中学校……………

横浜市立十日市場中学校……………

横浜市立あざみ野中学校……………

横浜市立山内中学校……………

横浜市立汲沢中学校……………

横浜市立十日市場中学校……………

横浜市立もえぎ野中学校……………

横浜市立旭北中学校……………

横浜市立新田中学校……………

横浜市立仲尾台中学校……………

三年

三年

二年

二年

一年

三年

三年

三年

一年

二年

五十嵐萌々夏

佐々木あおい

生野 菜椰

中川 琴美

中嶋 優

名波 春乃

馬場 咲帆

村上はるか

盛田 吟

米満 仁紀

38

40

42

45

48

51

54

56

58

60

参加校紹介……………

64

応募状況……………

66



入選者紹介（敬称略）

最優秀賞（横浜市長賞）

野田 千尋 病気と人権 …………… 横浜市立東山田中学校 三年

最優秀賞（横浜市教育局賞）

森 彩夏 見えないマークに目を向けて…………… 横浜市立南高等学校附属中学校 三年

渡部 晴 違いを認め合う平和な世界を目指す…………… 横浜市立岩崎中学校 三年

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

五浦 埜乃 役に立つ喜び…………… 横浜市立岡津中学校 一年

坂口 優花 兄を通して学んだこと…………… 横浜市立南高等学校附属中学校 二年

最優秀賞（横浜市人権擁護委員長賞）

松本陽茉莉

たすけ合うこと・支え合うこと……………横浜市立南希望が丘中学校 三年

加納 麻美

「風評被害」から学んだこと……………横浜市立中山中学校 二年

高橋 麗子

思いやりのはね返り……………横浜市立田奈中学校 一年

最優秀賞（横浜DeNAベ이스ターズ賞）

栗田 鈴菜

プラス一いちのすすめ……………横浜市立希望が丘中学校 二年

最優秀賞（横浜F・マリノス賞）

森 遥香

発信する人……………横浜市立鶴ヶ峯中学校 三年

最優秀賞（横浜FC賞）

蜂巢ひなた

「共に関わり合うために」……………横浜市立神奈川中学校 二年

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

黒瀬 亮太 くろせ りょうた いじめをなくそう 横浜市立港南中学校 一年

優秀賞（氏名五十音順）

五十嵐萌々夏 いがらしももか 外国人だった私 横浜市立田奈中学校 三年

佐々木あおい ささき あおい 言葉の杖 横浜市立十日市場中学校 三年

生野 茉椰 しょうの まや Change the world 横浜市立あざみ野中学校 二年

中川 琴美 なかがわ ことみ 認知症の方と接すること 横浜市立山内中学校 二年

中嶋 優 なかしま ゆう 子供が笑顔でくらせる社会 横浜市立汲沢中学校 一年

名波 春乃 ななみ はるの つなげよう、五輪の輪。 横浜市立十日市場中学校 三年

馬場 咲帆 ばば さきほ 一人の人間 横浜市立もえぎ野中学校 三年

村上はるか むらかみ はるか 人の心 横浜市立旭北中学校 三年

入賞（氏名五十音順）

盛田 もりた
吟 ぎん
米満 よねみつ
仁紀 のりとし

障害者の気持ち …………… 横浜市立新田中学校 一年
災害とプライバシー …………… 横浜市立仲尾台中学校 二年

秋山 あきやま
美鈴 みすず

二つのバリア …………… 横浜市立宮田中学校 二年

東 あずま
玲那 れいな

障害者差別をなくすために …………… 横浜市立盲特別支援学校中学校部 一年

荒井 あらい
大宙 だいち

最強の個性 …………… 横浜市立茅ヶ崎中学校 三年

井上 いのうえ
知映 ちえ

障害者と共に生きる …………… 横浜市立万騎が原中学校 一年

岩崎 いわさき
海夏 みか

車イス利用者の生活 …………… 横浜市立今宿中学校 一年

江花 えはな
暢笑 のえ

一人一人の人間がいる …………… 横浜市立南高等学校附属中学校 三年

大城 おおしろ
月姫 るな

周りの人の優しさ …………… 横浜市立栗田谷中学校 三年

大場 おおば
海翔 かいと

男女共同参画社会について …………… 横浜市立森中学校 三年

松岡	福士	原田	長谷川	西堀	西沢	高橋	高木	黒山	梶原	岡本	岡村
まつおか	ふくし	はらだ	はせがわ	にしぼり	にしざわ	たかはし	たかぎ	くろやま	かじわら	おかもと	おかむら
莉穂	深月	優季	真凜	立海	郁輝	乃香	織乃	輝	裕海	友子	心愛
りほ	みづき	ゆき	まりん	はるうみ	ふみぎ	のか	りの	てる	ゆみ	ゆこ	ここあ

母からの言葉で 横浜市立大正中学校 一年

多様な個性 多様な生き方 横浜市立浜中学校 二年

自分らしくいる権利 横浜市立茅ヶ崎中学校 二年

僕の隣人 横浜市立樽町中学校 三年

繊細さを武器にして生きる 横浜市立汐見台中学校 三年

「ステレオタイプ」を捨てて 横浜市立荏田南中学校 三年

壁の向こうの未来へ 横浜市立大綱中学校 二年

それぞれの個性を大切にしたい 横浜市立六角橋中学校 一年

コトバの魔法 横浜市立小山台中学校 一年

教育を受ける権利を守って 横浜市立戸塚中学校 一年

誰もが安心できる生活のために 横浜市立みたまけ台中学校 三年

近くて仲の良い国へ 横浜市立都田中学校 三年

松ヶ瀬 悠まつがせ はるか

松本あやめまつもと

三浦 由貴みうら ゆき

御既 翠みまや すい

矢野 詩織やの しおり

山内 彩加やまうち あやか

山口 暢華やまぐち ののか

和久津俊太わくつしゅんた

几百年前是一家 …………… 横浜市立横浜吉田中学校 二年

ごめんなさいが傷つける心 …………… 横浜市立六ツ川中学校 三年

一人はみんなのために、みんなは一つの目的のために …… 横浜市立東山田中学校 三年

出身地はほんの印 …………… 横浜市立義務教育学校西金沢学園 九年

高齢者と運転 …………… 横浜市立軽井沢中学校 二年

助けられて知った事 …………… 横浜市立茅ヶ崎中学校 三年

男女差別について …………… 横浜市立みたけ台中学校 二年

まちな心もユニバーサルデザイン …………… 横浜市立旭中学校 二年

病氣と人権

横浜市立東山田中学校 三年

野^の田^だ千^ち尋^{ひろ}

「ずっとこのままなのかな。周りからどう思われるのだろう。」

一年前、私は幼いころから患っている脱毛症が再発しました。脱毛症とはその名の通り体の毛が抜けることです。症状が進むと髪の毛だけではなく、体全体から抜けるようになります。私の場合は二年に一回ぐらいの周期で症状が出るのですが、去年の夏は特に症状が強く、頭全体から髪の毛が抜け落ち、誰が見ても抜けていることが分かる状態になっていました。思春期に入った私にとって、日が経つごとに自分の見た目に変化が起ることはとても苦しいものでした。会話中に人の視線が私の頭に行くこと。写真を撮りたくても強い抵抗を感じる。誰かが言った冗談すら、自分が言われているかのように傷つくこともありました。また、前にたつことが嫌でも、委員会の活動でどうしても前に立たなければいけないことが多かったり、今までは当たり前に参加していた体育の授業でも、なかなか積極的になれなくなったりして、辛くて学校に行きたくないと思う日が続きました。

それでも私が学校を休むことなく乗り越えられたのは、周りの人の何気ない言葉のおかげでした。「委員会頑張ってくれてありがとう。」という感謝の言葉。「いつもお疲れ様。」という励ましの言葉。「無理してない？」

大丈夫？」という気遣いの言葉。この一言一言にこめられた思いやりが私に寄り添い「明日もきつと頑張れる。」という希望を与えてくれました。そして何よりも、私には、私が時々自虐的なことを言っても「そんなことないよ、大丈夫。」と言ってくれる、小さなことにも気づいて「治ってきたね！よかったじゃん！」と声をかけてくれる友達や先生方、あまり話したことがなくても私を批判的に見ずに、むしろ私に症状がないかのように自然に接してくれる人がたくさんいました。そして、私がるべくイヤな思いをしないようにと座席を後ろにしてくれた担任の先生のさりげない優しさや、私を心の底から思ってくれる家族の支えがありました。

私と同じ病気を患っている人は世の中にたくさんいます。きつともつと深刻だったり、病気が原因でいじめられ、学校に行けなかったり、周りの人に恵まれず誰にも相談できないまま苦しみを抱えている人もいます。他の病気だつて同じです。私はこの脱毛症の経験を通して、そのような境遇にいる人の心境を少しでも身近に感じることができました。そしてそういった苦しみを抱えている人たちを少しでも救うことができるのは、私がたくさんの人からもらったものと同じ、思いやりだと思います。性別や年、知り合いかどうかは関係なく、その人の優しさや気遣いから成っていて、誰でももつことができるのが思いやりです。

このような体験から、皆さんにお願いしたいことがあります。それは病気をもつ人に寄り添ってほしいということです。寄り添うというのも、側にいることだけではありません。病気について知ろうとすること。困っていたら手を貸すこと。話しかけてみることに。様々なかたちがあります。これらのことは単純なことでもあり、同時に難しいことでもあると思います。傷つけたくないと思うから、どう接すれば良いか分からないから、そういった理由で避けてしまう人も多いと思います。しかし、避けてばかりでは何も生み出しません。勇気をもって一歩を踏み出し、その病気を知ることによって、やっとその人の内面にたどり着くことだつてあり

ます。人は病気によつて差別されるべきではない。このことを多くの人が認識し、隔たりを少しずつでも縮めることができたなら、よりたくさんの人の未来を明るくすることができるとは思いません。不合理な差

人権とは、人間が人間らしく生きる権利のことです。自分の思いや考えを自由に発信すること。不合理な差別を受けないこと。幸せや生きがいを追及すること。これらは全て人権に当てはまります。言つてしまえば私たちにとつて当たり前のことです。でも本当にそれは「みんなにとつて」当たり前ですか。忙しい毎日に流されて、他人は他人、自分は自分、と考えていませんか。私は脱毛症の経験を通して周りの人の思いやりがどれだけ支えになるのかを直に感じることができました。私自身もその支えになれるように忙しい日々の中でも少しずつ思いやりをもてる人になりたいと思います。あなたの少しの思いやりが誰かの大きな救いになります。そうして一人一人の思いやりが集まれば、お互いの人権が守られる、隔たりのない世の中になるのではないのでしょうか。

見えないマークに目を向けて

横浜市立南高等学校附属中学校 三年

森^{もり} 彩^{あや} 夏^か

妊婦さんがつけるマタニティマーク、体や心に何らかのハンデがある方がつけるヘルプマーク。日々色々なマークを目にする機会があるでしょう。マークは文字の読めない小さな子供にも分かり、それをつけるだけで見えた人は理解し手を差し伸べられる、とても便利なものです。

では、こんなマークを知っていますか。「わけあってこちら側で止まっています」その言葉とともにエスカレーターのイラストがかかれています。私は知りませんでした。電車の乗りかえでエスカレーターを利用した際、初めてこのマークを目にしました。もちろん文字を読むことができるので理解はできます。でも「わけあって」とはどういうことなのか分かりませんでした。その駅にはいくつもの路線が集まり、エスカレーターにもたくさんの方が溢れていました。そんな中でそのマークをつけた男性がエスカレーターの右側で止まっていたのです。男性の後ろには長い列ができていました。そのことに腹を立てた方がその男性に「早く進めよ。右側は歩く奴が乗る側なんだよ。」とどなり立てたのです。男性はただただ申し訳なさそうにしていました。私は「何か訳があるみたいですよ。」と声をかけるか迷いましたが結局声はかけられませんでした。家に帰ってからふとそのことを思い出し、そのマークについて調べてみました。「マナーアップキーホルダー」という

らしいそのマークは、体の麻痺などをかかえる方向けだそうです。例えば、体の左側が麻痺している方は右側で手すりにつかまらなくてははいけません。けれども多くのエスカレーターでは右側が歩く人用というまちがった暗黙のルールが生まれているので、そうした人たちが右側で止まりにくいことがあります。そんな時、そのマークがあれば麻痺を抱えた人も、その後ろにいる人も嫌な気持ちにならずに止まることができます。私はいいアイデアだなと心から思いました。

しかし、同時になぜマークをつける必要があるのだろうかと思惑に思いました。何らかの事情があるのだろうかとおおらかに考えられればこのマークはいりません。きつとエスカレーターの右側で止まるという本当に小さなことすら、許せないような雰囲気があるからだと思えます。もしも自分がマークをつけなくてはいけなくなったら今の社会はとても生きづらいものでしょう。では理想の社会とは何だろうと考えたとき、私はマークなどつけなくても互いに互いの違いを尊重し手をさし伸べられるような社会だと思えます。互いの違いを尊重することはお互いの人権を守ることでもあります。

私は今年の春、初めて松葉杖をつきました。松葉杖はマークと同じくらい、自分が怪我をしているということとを周りにしらせませす。私に気がついたたくさんの人がバスで席をゆずってくれました。時には荷物を持ってくれる方もいました。私にとって歩くのはとても難しいし、揺れるバスの中で立つのも難しいことでした。だからそうした人たちの温かい気持ちにふれるたび私はとても嬉しい気持ちになりました。そんな経験から誰が、いつ、どんなハンデを背負うかはわからないけれど、そうした時に手をさしのべてくれる人がいたとしたらきつととても救われるのだらうと思うようになりました。

そして私は自分が分けてもらった優しさを今度は誰かをたすけることに使っていきたいと思いました。

もちろんマークをつけている方への配慮は必要です。でも、それだけではなくて周りの人に心配りをするところが理想の社会の実現に不可欠なのです。見ためではわからない、いわば「見えないマーク」に気がつくことは難しいことかもしれません。時に空回りすることもあるでしょう。でもそうやって周りの人たちを気にかけることでいつか優しさに溢れた社会に近づいていくのだと思います。いつの日か、マークなどつけなくても互いを助け合えるような社会にしていけるかは自分たちの行動次第なのです。

違いを認め合う平和な世界を目指す

横浜市立岩崎中学校 三年

渡部

晴

そこは深い緑で囲まれたとても静かな東京近郊の場所にあった。私は最近ニュースで取り上げているハンセン病訴訟について気になり理解を深めたいと思ったので東京都東村山市にある国立ハンセン病資料館へ行った。そこは私が想像していた以上に新しく、とても美しい施設だった。建築リニューアル工事を終え、二〇〇七年に再開館した。中に入ると色々な展示物が目に入り、私は学芸員さんの話を聞きながら施設をまわった。ハンセン病はらい菌による経過の慢性な感染症である。感染しても発症するとは限らず今では発症自体がまれだ。また万が一発症しても急激に症状が進むことはない。初期症状は皮疹と知覚麻痺である。治療がない時代には変形をおこすことや治っても重い後遺症を残すことがあった。そのため、主に外見が大きな理由となって社会から嫌われてきた。しかし、現在では有効な治療薬が開発され、早期発見と早期治療により後遺症を残さず直せるようになった。

十九世紀後半、ハンセン病はコレラやペストなどと同じような恐ろしい伝染病であると考えられていた。当初は、家を出て各地を放浪する患者が施設に収容されたが、やがて自宅で療養する患者も収容されるようになった。ハンセン病と診断されると、市町村や療養所の職員、医者らが警察官を伴ってたびたび患者のもとを

訪れたそうだ。そのうち近所に知られるようになり、家族も偏見や差別の対象にされることがあったため、患者は自ら療養所に行くより仕方ない状況に追い込まれていったのだ。このような状況のもとで、すべての患者の隔離を目指した「癩予防法」が成立し、各地にも新しく療養所が建設されて行ったり、各地で「無癩県運動」という名のもとに患者を見つけ出し療養所に送り込む施策が行われていったのだ。これに対しては、このような光景が、人々の心の中にハンセン病は恐ろしいというイメージを植えつけ、それが偏見や差別を助長していったのではないかと考えた。

施設の「癩療養所」というブースでは、治療薬ができる前の時代を中心に療養所の中の患者がいかに過酷な状況下で生活し、また人間らしさをうばわれたかを知った。患者が患者を介護したり、患者が亡くなった時、同じ患者が火葬、埋葬を行ったり、園内で火災が起きた場合、外との交流は一切許されなかったことから自分たちで消火活動を行ったことなど私には想像できない、かつ理解し難い、衝撃を受けた。また、「らい予防法」が廃止された今でも差別や偏見には根強いものがあるため、療養所の外で暮らすことに不安を感じ、安心して退所することができないという人もいるのだ。このように、未だ残る差別と偏見に元ハンセン病患者は現在も心痛めている現実があると知った。

このような辛く、悲しい療養所生活の中でも、わずかな光を信じ、生き抜く力を感じた一枚の写真が展示であった。それは「舌読」といい、目が見えない、そしてハンセン病の症状による知覚麻痺のため、指で点字を読み取れないある男性が、舌を使って読み取る姿を写した一枚である。その写真を見て、自分に残された方法で生き抜こうとする力、そして、人間の計り知れない力というものを感じる事ができた。

今回、ハンセン病資料館での学びをきっかけに、病気がそのひとの姿かたちをどのように変えようとも、人

は誰でも侵すことのできない永久の権利をもっていることを改めて考えた。

差別・偏見とは知識不足と、また、その知識不足から膨らませるイメージが作り出したものと私は考える。また、理解力不足・正しい知識を共有できないコミュニケーションであることも差別と偏見を生み出す原因であると私は考える。このことから差別・偏見を生まないためには、正しい知識の発信力が必要とされるのではないかと思った。そして、その正しい知識を共有できる環境づくりが大切であると思う。

この学習を生かして私も社会の一員であることを自覚し、少しでも差別・偏見を生み出さない社会を作っていきたいと考えている。

見学のあと、全生園の敷地内の通路から、今現在もハンセン病元患者が生活されている住宅区域を見わたした。梅雨空の下、湿気で重苦しい空気の中、私の耳元を爽やかな風が吹き抜けていくのを感じた。この風が、正しい知識とともに、多くの人に届けばよいと強く思う。

役に立つ喜び

横浜市立岡津中学校 一年

五^{いっ}浦^{うら}埜^の乃^の

私は夏休みに、母の職場である小規模多機能型居宅介護事業所にボランティアとして行く事になった。そこは高齢者が施設ではなく、自宅で生活を送る事が出来るようにデイサービスを中心として、利用者の家に訪問し、家事の手伝いや、施設での宿泊など様々なサポートを行っている施設だそう。

私が訪ねた日、施設は夏祭りを行っていて、利用者の方々が大勢来ており、また地域の小学生もボランティアとして手伝いをしていた。私は母やスタッフの方の手伝いや、小学生と一緒に出店の準備等を行った。

そして夏祭りが始まり、私はある高齢男性と出店を回ってほしいと頼まれた。足が不自由で杖を使って歩き、聞き取りにくい声で話されるその方と過ごす事に最初は戸惑ってしまった。私に何が出来るのか分からないながらも、男性に合わせてゆっくりと歩き、少しでも歩きやすくなるようにその方の荷物を持つたりした。声かけをしながら一緒に出店の食べ物を食べたり、ゲームに参加したりした。男性はとても楽しそうに笑顔で過ごしていて、私に何度もありがとうと言ってくれた。私は最初に感じていた戸惑う気持ちがなくなり、手伝いが出来た事、感謝の言葉を貰えた事が凄く嬉しく思った。

後にその男性も自宅で車椅子の高齢女性と夫婦で二人暮らしをしていると聞き、驚いた。私にはその夫婦

が、二人共に介護が必要そうに見えたからだ。この施設の様々なサポートを受けながら、夫婦二人、自宅で生活を送っているそうだ。

私は施設の所長から「この利用者は認知症の方が多く、この行事に参加した事さえも忘れてしまうかもしれない。けれどその時その時間を楽しんで過ごしてもらえるようにしている。高齢者の方が自宅で生活を送っていると、地域との繋がりを断つてしまう事も多々あるが、地域の方に参加してもらえらる行事がある事により、住み慣れた地域と繋がる事が出来る。このような行事はとても大切だと思う。」と説明していただいた。そして私が「この仕事は大変ですか。」と質問すると「ありがとうという感謝の言葉を貰える事がとても嬉しく、大変だと思った事は無い。」と答えてくれた。施設では利用者の方の生活の為に、様々なサポートを行っている、楽しく過ごしてもらえらるように優しく介護の仕事をしている事が分かった。

私はボランティアに参加し、利用者の方と接し、そこで働く人の話を聞き、多くの事を学んだ。色々な老後の過ごし方があり、体が不自由であったとしても、認知症だとしても周りの温かいサポートがあれば、安心して生活が出来る事を知った。そしてまだ中学生の私にも人の役に立てる事があり、安心して過ごせているこの日常がどれほど素晴らしい事なのか分かった。

今日の学びを忘れずに、またこの幸せな日々を当たり前の事だと思わずに、毎日を大切に生きていきたい。そして、困っている人がいれば、手を差し伸べてサポート出来る、少しでも役に立てる、そんな人になりたい。

兄を通して学んだこと

横浜市立南高等学校附属中学校 二年

坂さか 口くち 優ゆ 花か

私の兄は障がいを持っている。

「ダウン症候群」というもので、染色体に異常が生じることで起こる障がいだ。

そんな私達を育ててくれた母はフルタイムで働いている。今、この世の中では女性問題がさげばれているが、私の母は障がいをもった子どもを育てながら仕事もこなしている。そして、仕事をしながら子どもを育てるということは子どもあずける必要が出てくるということだ。

私はそのときまだ子どもだったので、母親の苦労は計り知れない。だが、後から話を聞くと、保育園に入れるのにも学童に入れるのにも私の母のまわりでほとんど前例がなく、母の行動は少し異色のものだったのだ。それに、前例がほとんどないことで対応の仕方がわからないということも多々あった。

例えば、みんなでソーラン節を踊ることになったとき。当時踊ったソーラン節では踊りを覚えること、隊形移動を覚えることが必要になる。はっきり言えば、兄はそこまでの能力がまだなかった。しかし、雰囲気でも…ということだろう、先生達が兄も一緒に踊れるように練習をしてくれて、ソーラン節を踊れた。先生達はソーラン節を今まで通り行うか、それとも、兄のできることに合わせてソーラン節をなくすか考え、なやんだ

はずだ。

このように「前例のない」ことには困難や葛藤が生まれる。

しかし、こんな例もある。

私の家族は兄をつれてどこへでも出掛けていく。私はそれが普通だと思っていたし、実際、兄がいることで笑いが起きたりみんなが笑顔になる場面がある。そして、母は仕事と子育てを両立させるため、兄も私も学童に入れた。そんな私の兄を見て、同じような境遇で不安に思っていたり、小さなダウン症の子どもがいる親が「元気になる！」や「はげみだよ」と言ってくれることがある。

つまり、「前例のない」ことをやることで困難が生まれても、必ずどこかでそれを前例として参考にしてくれることで、笑顔が生まれることがあるということだ。

その中で、私の母は仕事と子育てを両立させてきた先駆者と言えるだろう。当時の風潮として、障害者をタブー視する傾向にあった。そのため、障がい児を育てながら仕事をするなんて世間からしたらそれこそありえないことだったと思う。

しかし、今はその考え方は古いものだとは考える。今どき「女性に働くことができる環境を！」というのが普通であり、自由に声を上げられる環境になってきていると思うからだ。

それなら、障がい者だって自由に声を上げてもいいじゃないか、と私は思う。障がい者の家族だって自由に働いたり、生活してもいいじゃないか、とも思う。

しかし、現状は思うようにはいかない。やはり私が学校で兄弟の話をしたときはびっくりした感じで見られるし、前よりは回数は減ったように感じるが、兄と歩いていると白い目で見られることもある。そのようなこ

とを感じてしまうたびに障がい者はきつと異質な存在だと思われているのだなと思ってしまう。

しかし、障がいも字を書くことが苦手、走るのが苦手、というようにその人の個性なのだ。だから、障がいをもっている人は個性がまわりにいる人より少し豊かというだけで当たり前に生活している人なのだ。

障がいをもっている人でも、障がいをもつ子を育てる親でも、サラリーマンでも、子どもでも、主婦でも、お年寄りでも、みんなが平等な社会でみんな意見を言いあえ、みんなが暮らしやすい社会。

そんな「思いやり」あふれる社会になってほしいと私は心から願っている。

たすけ合うこと・支え合うこと

横浜市立南希望が丘中学校 三年

松^{まつ} 本^{もと} 陽茉莉^{ひまり}

二〇一一年三月十一日十四時四十六分、当時私は福島県双葉郡にある保育園に居ました。大きな揺れの中担任の先生に机の下にもぐるよう指示されたのを覚えています。何が起こったのか分からずただ泣いてばかりいました。

そして、次の日に福島第一原発の水素爆発により避難区域になってしまったため、兄弟家族で母の運転する車で神奈川県まで来ました。途中コンビニに寄るも何も手に入らず一本のペットボルの飲み物をみんなで分け合いました。長びく避難生活の中地域の方々に温かく迎え入れられ、人の優しさにたくさん触れました。今でも感謝しきれません。

ですが小学校に入学する日「福島から来た子と一緒に勉強させて大丈夫なのですか。」と話している声が聞こえてきました。母に「福島は悪いことしたの」と泣いて尋ねました。母は「全然悪くない。何言われても堂々としていなさい。」と言いました。

好きで好きならふるさとを捨てて来たわけではない、大好きな友達とバラバラになったわけではない、なんでもこの場所に居るのかさえも分からず、ただ泣いて入学式を過ごしました。その時に何の偏見も持たず仲良く

してくれた友達は今では大切な親友です。彼女には本当に助けられたと思っています。

その他にもいわきナンバーの母の車が何者かに傷を付けられる事が何度ありました。福島から来たというだけでどうしてこんな事をされなければならぬのか理解に苦しみました。

テレビでも、サッカーの川島選手が「福島福島」とブーイングを受けた事があったと母からきました。

今では当時のことの理解が増え、毎日が平凡に過ぎていっています。たくさんの風評被害もテレビで報道されました。今でもテレビや、いろんな写真を見たりすると本当に、怖かった。なんで福島が震災にあわなきゃいけなかったんだろうと思いました。でも、逆に震災がなかったら、大切な親友にもあうことはできなかったと思います。

私は、自分が生まれ、育った福島を今でも忘れません。たくさんの自然に囲まれ、きれいな星がたくさんあり、すんだ空気が広がっていました。そんなふるさとが私は、大好きです。すごく大変で嫌な気持ちになったことも、たくさんあったりしましたが、まわりにたくさんの優しい方々に助けられたんだと思いい感謝でいっぱいになりました。ですから絶対に東日本大震災のことをわすれては、いけないと思いました。

人の間違った思い込みや何気ない言葉や行動で傷つく人がいることを忘れずに、これからも頑張っていきたいと思います。そして、たくさんいただいた優しさを、いろんな所で少しずつだしていけるように、私にできることは、一日一日を大切に過ごすこと、家族や友達とあたりまえに普通に過ごすこと、苦手を勉強も頑張ること、このようなことを私は実践していきます。

「風評被害」から学んだこと

横浜市立中山中学校 二年

加^か納^{のう}麻^{あさ}美^み

「風評被害」

私が初めてこの言葉を知ったのは、四年前のことでした。

八年前の三月十一日、東日本大震災が起きました。福島県の原子力発電所から放射性物質が漏れて、その周囲が大変な被害を受けたことを知った私は、放射線が降った場所は危険だと、東北を偏見の目で見るようになりました。

私が母と買い物へ行ったときのことです。並んでいる食品の中に、福島県産のブロッコリーがありました。しかし、母からブロッコリーを取ってくるように言われた私は、福島県産の物を避け、別のブロッコリーを選んでしまったのです。品質に違いは無かったのに、放射線が含まれていて、それを食べてしまったらどうしようという恐れが、そのような行動につながったのだと思います。

母にそのことを話すと、母が

「本当に、食品に放射線が含まれているかどうか、調べてみたら。」

と言うので、家に帰ってから早速調べた私は、東北の農家の現状を知り、衝撃を受けました。震災後は、福島

県産というだけで食品が売れなくなり、廃業する農家も出てきているのだそうです。農家の人が、「福島県産の野菜の安全性を証明しようと、店頭で放射能測定器を使って食品の分析をするなど、我々も努力しているのに。」

と言っているのを見て、はっとしました。スーパーでの私の行動は、偏見を無くそうとしている人たちの努力を否定したことだと思っただけです。人の努力を否定することは、その人の人権を否定するのと同じことだと、気がつきました。

人権を大切にしない、というのはよく耳にする言葉です。今までは、とても難しいことだと思っていましたが、人の努力を認めることは、いつでも、誰にでもできる人権尊重だと知りました。

そして、私が風評被害から学んだことが、もう一つあります。それは、偏見は思いこみから生まれるということです。東北産の食品には、ほとんど放射能は含まれておらず、安全だということを知らない人は、まだ多いそうです。実際、消費者に放射能測定器で測定した結果を伝えると、商品の売上げが伸びたという会社もありました。真実を知らない人がいるから、風評被害に苦しむ人が生まれるのです。思いこみで起こした行動は、偏見につながります。うわさを信じて行動するのではなく、きちんと、本当のことを知ってから行動に移すことが大切だと、思いました。

お互いの努力を認め合う。思いこみだけで行動しない。この二つが、人権尊重の第一歩となることを、私は風評被害から学びました。風評被害だけではなく、偏見に苦しむ人を無くし、皆の人権を守る。そのためには、認め合う心と正しい知識、そして、行動を起こそうとする気持ちが必要だと思います。

思いやりのはね返り

横浜市立田奈中学校 一年

高橋麗子

私のおばあちゃんは、前に病気をして足こしが悪く、体力も落ちてきている。それなのに、私のおけいこ事や演奏会などがあると、付きそいをしてくれる。私の家には車がないので移動手段は電車しかない。

ある日、私とおばあちゃんは演奏会を聞きに行った。もちろん電車でだ。演奏会開演は夕方、終わる時間は帰宅ラッシュだった。

「席、座れるといいね。」

と、私はおばあちゃんと話しながら電車を待っていた。電車は人がたくさんいて「なんとかおばあちゃんに座ってもらわなきゃ」と心の中で考えていた。電車に乗ると席は満員。けれど私とおばあちゃんが乗ってきたのを見て席を立てくれた人がいた。良かった〜と私は思った。私はおばあちゃんと空いた席まで歩いていった。するとそこに、サツと若い男の人が座ってしまった。そんなあ……。と、がっかりした。おばあちゃんは疲れた様子だったし、私がなんとかしなきゃ、と思った。ドクンドクンと、心臓が鳴り響く。男の人を見つめる。「席譲ってくれませんか」って言うんだ。男の人と目が合う。自分で気付いて！と私はその瞬間そう思った。すると男の人は少しおばあちゃんの方に目を向けるとまたスマホゲームを始めてしまった。もう、席を

譲ってなんて言えない。私はがっかりし、怒りがこみ上げてきた。なぜ譲ってくれないの？思いやりがないの？とさまざまな思いでいっぱいだった。けっきょく席に座れたのは長い時間経ってからだった。

それからしばらくして、また電車に乗る機会があった。今度はお母さんと一緒だった。電車に乗ると席は空いていた。私は読みたい本があったのですぐに座った。その本に夢中になってしまつて気がつくともうすぐ降りる駅だった。私はハツとした。前にお年寄りの夫婦が立っていたのだ。私はあわてて席を立った。すると、「ああ、いいのよ。もう次の駅で降りるので今から座つてもあまり変わらないから。」と、断られてしまった。私は耳が熱くなるのが分かった。

「この前、あの男の人の事をあんなに怒っていたのに、私も同じ事をやってしまった。」
私はとてもはずかしくなった。その日は一日中この事を考えていた。

家に帰るとおばあちゃんが待っていた。私は自分はずかしくておばあちゃんと顔を合わせられなかった。するとおばあちゃんが、

「どうしたの、そんな暗い顔して。」

と、私に尋ねてきた。全く、おばあちゃんは私の何もかもお見通しだ。私は思いきつておばあちゃんに全てを話した。若い男の人の事も今日のことも。全てを話し終わった後、おばあちゃんは、にっこりして話し始めた。

「なーにそんなこと。そんな落ちこんだつてしょうがないわよ。今、あなたは反省しているんでしょう？それなら今日の失敗を次にいかしなさい。思いやりとは、はね返ってくるものなの。あなたが誰かを思いやると、あなたが思いやられるのよ。不思議だと思うかもしれないけど本当よ。そうでしょう？」

確かにそうだ。と、私は納得した。時と場所、順序は逆だけど、私がお年寄り夫婦を思いやらなかつたから若い男の人に思いやられなかつたんだ。きつと。

私は一つ学んだ。誰かに思いやられたいのなら、まず自分が誰かを思いやる事。そうすればきつとはね返ってくる。

こういう考え方をする人がもつと増えていけば、きつと日本は今よりも、もつと平和な国になると思う。ましてや、世界中の人達がこういう考えを持てば争い事はなくなると思う。高齢者を思いやる気持ちと、世界の人々を思いやる気持ちは、きつと同じなんだ。きつとつながっているんだ、と私は思った。

プラス^{いち}のすすめ

横浜市立希望が丘中学校 二年

栗^{くり} 田^た 鈴^{すず} 菜^な

最近、様々な分野においてAI化が進み、人と関わり合う機会が極端に減ってきている気がする。電車に乗る時も、スーパーのレジでも、洋服など物を買うことでさえも、人と関わることなく済ませられることがどんどんと増えてきている。同時に、AI化が進むにつれ操作が複雑化して高齢者にとって住みづらい世の中になっではないだろうか。

ある日、気になる投書を新聞で見つけた。毎日毎日、杖をつきながら大変な思いをしてスーパーに買い物に来る一人暮らしのおばあさんを見かねて、投書したおばあさんが言った。「まとめて買って行ったらどうですか。数日は外に出なくてすみますよ。」

それに対しておばあさんはこう答えたそうだ。「私は人と会話がしたくてスーパーに来ているのですよ。」と。私が住んでいる所は高齢者が多いので、毎日当たり前のように会話をする。まだ小さくて家の鍵を開けられず泣いていた私を助けてくれたのも、転んで怪我をした時、介抱してくれたのも、朝、走っている時にアドバイスをくれたのも、すべて高齢者と呼ばれるおじいさんおばあさん達だった。私にとって高齢者とは、祖父や祖母を含めて小さい時から頼りになるとても大切な存在である。私の中ではそんな揺るぎない存在のはずの高

高齢者について、ふと疑問を持つようになったのがこの投書だった。たくさんさんの便利なツールが世の中に出回り、それを楽しんでいる私だったが、平均寿命が年々延びて長生きできるようになった高齢者の人達は、果たして幸せなのだろうか。

人と関わるということはやはり人間にとって必要なことであり、それによって喜びや悲しみといった人間らしい色々な感情が生まれてくると思うのだ。だから、便利さと引き換えに、人との必要な関わりまでが無くなってしまうと、何か大事なものが失われていくような気がしてならない。

今後さらに色々な分野でAI化が進んでいくとしても、例えばスーパーのレジのうちの一つは有人レジを残すなどしてはどうだろうか。ちよつと何かを聞きたい時に人がいてくれるというのはとても心強いし、そんなちよつとした気遣いや周りの人達の温かい目が高齢者の人達の心にゆとりをもたらしてくれるのではないだろうか。

夏休みに一人暮らしの祖母の家に遊びに行った。祖母は八十才の高齢者であるが、笑顔で私にこう言った。「昨日、近所に住んでいる九十五才のおばさんに頼まれて庭の草取りをしてあげたの。暑くて大変だったけれど、きれいになったってすごく喜んでくれて本当に嬉しかったよ。」この祖母の一言で、私は目から鱗が落ちたような気がした。高齢者といっても、みんな同じではないのだ。できないことばかりではないのだ。だからこそ、自分の出来る範囲でいい、一日の行動に、他の人のためにできることを一つプラスしてみたらどうだろうか。立場が違えば見える景色も違う。色々な世代や境遇の人達が、自分の立場で自分のできることを考えて行動する。これをたくさんの人達が行ったらいったいどれだけのプラスが生まれるだろうか。その一つ一つがどんなに小さなものだとしても、その積み重ねが後に大きな違いを生み出すと考える。

高齢者に優しい世の中というのは、ひいてはみんなに優しい世の中につながっていくと思う。また、人は優しさを受けると自分も誰かにしてあげたいというプラスの気持が芽生えてくる。それは他人を尊重し、同じように自分をも大事にすることにつながっていくと思うのだ。これからさらに高齢化が進んでいく未来に向けて、色々な視点からこの問題を考えていかなければならないと思う。

私のプラス一、今日はいつも私の話を聞いてくれるおじいさんおばあさん達に、その日一番楽しかったことを話して笑顔になってもらおう。そして、毎日会話を重ねていくことで、高齢者の人達の考えや願いを知り、自分のできることから少しずつ行動にうつしていきたいと思います。この道は、私もそして誰もが通る道であるのだから。

発信する人

横浜市立鶴ヶ峯中学校 三年

森^{もり} 遥^{はる} 香^か

私は私、父は父、母は母、弟は弟。人間という生き物は無数に存在しますが、それぞれが唯一無二の存在であり、互いに尊重し合って成り立つ生き物だと思っています。たとえ障害があっても。

私の父は「高次脳機能障害」という障害を抱えています。高次脳機能障害は外見で分からないため、別名「見えない障害」とも言われています。もし、みなさんが私の父と会ったとしたら、普通の人に見えていることでしょう。外見では普通の人に見えても、目に見えない障害が父の体に潜んでいるのです。

父や私たち家族が高次脳機能障害という言葉を知ることとなった全てのきっかけは、単身赴任先でのことでした。

父が仕事のため、県外で一人暮らしを始めて三年目の夏、私が小学校六年生のときでした。工作中、職場の人に

「いつもと違うね。様子がおかしいよ。すぐ病院で診てもらったほうがいいんじゃない。」父はそう言われたそうです。

病院で診てもらったところ、父は、「脳梗塞」と診断され、そのまま緊急入院し治療が開始されました。も

う少し診断が遅れ、治療を始めるのが遅かったら、命に関わっていたかもしれないなかつたそうです。

父が入院した。そう知ったのは、母と弟と出掛け、帰宅したあとの母の口からでした。あまりに急な出来事で、私の頭は最初、全く働かずにいました。

「どうせいつもの冗談だろう。」

そう思った瞬間もありました。

急いで病院へ向かう準備をして病院に着いたのはもう夜中でした。面会したときの父は車椅子に乗り下を向いて、まるで別人のような、以前や今の父とは違う顔をしていました。私たち家族の顔を全くと言っていいほど見てくれず、わけの分からないことをただひたすらブツブツとつぶやくだけ。

ちゃんとした話もできずに面会は終り、私はエレベーターを待つ間、耐え切れずに号泣しました。あまりに衝撃的な事実を目の前に突き付けられたと同時に、変わり果てた父の姿に恐怖を抱いたからです。父とまともに会話ができなかったため、

「名前を忘れられているんじゃないか。」

そう思ったのも号泣した一つの理由です。私はその日、寝る直前まで涙が止まりませんでした。

その恐怖は二・三日ほど消えることはなく、面会に行くのが怖く、嫌だと思いう日が多くあり、父と会うことがつらく感じていました。

そんなとき母は、病気になる前の自分を覚えていたため、色々なことが出来なくなった自分にショックを受けたり、落ち込んだりする父の姿を見て、高次脳機能障害を疑いました。見えない障害は、その名の通り分かりにくく、周りからは理解されにくい。そんな高次脳機能障害を、母は見抜いていたのです。

そこで、私は高次脳機能障害について知るために、近くの図書館で、柴本礼さんが書いた「日々コウジ中」という本を借りました。礼さんの旦那様コウジさんが、高次脳機能障害になる前から診断されたあとの暮らしまで、実体験が書かれていて、私はその本を通して沢山のことを知りました。高次脳機能障害は誰がいつ、どこでなるか分からないということ。高次脳機能障害には沢山の機能障害があるということ。そして何より、父の障害はコウジさんに比べると非常に軽いということ。

高次脳機能障害は、実に、十個以上の症状があり、コウジさんは記憶障害や注意障害など、五個以上もの症状を抱えています。

私の父は、コウジさんほど沢山の症状は見られません。ですが、障害を抱えているのは事実であり、父が大変な思いをしているかもしれない。そう思うと父が心配でなりません。それと同時に、母も一人で沢山のことを抱えているかもしれない、なんでもっと早く気づけなかったんだろう。そう気づいたのはつい最近で、後悔してもきれないほです。

私は、つい最近まで高次脳機能障害を知りませんでした。そして今も高次脳機能障害を理解していません。だから私はこれから、高次脳機能障害について沢山学びます。母には「この本だけじゃなくて、病気に関する法律や福祉、リハビリなどの本を沢山読んで、父の病気が困っていることも理解してほしい。」そう言われました。父だけでなく、病気で偏見を持たれてしまう社会に、人に、自分が出来ることは何かを考え、学び、行動出来るようになりたいです。

そしていつか、柴本さんのように、高次脳機能障害を始め、沢山の病気をこの世の中に伝え、広がり、知り、それぞれが唯一無二の存在であるということを発信する人に…。

「共に関わり合うために」

横浜市立神奈川中学校 二年

蜂^{はち} 巢^す ひなた

「ガンッ！」

大きな音がして、車椅子が倒れる。私は怖くなり、思わず目をつぶった。しかし、選手はすぐに起き上がりボールを追いに向かった。私はその姿に衝撃を受けた。すさまじい迫力でプレーをする選手に、私はどんどん引きこまれていった。

私は、学校で配られたプリントの文字を見て興味をもった。「車椅子バスケットボール体験会」。車椅子でどうやってプレーするのだろうか、面白そうだなと気になって行ってみることにした。車椅子バスケットボールのルールは一般のバスケットとほぼ同じだが、障害のレベルに応じてクラス分けがされ、障害の重い人も軽い人も等しく試合に出場できるよう工夫されている。

実際に体験し始めに感じたことは「プレーする選手はすごい！」ということだ。まず、車椅子でうまく進むことができない。うまく前に進めない、すぐに腕が疲れてしまった。また、ゴールまでボールが届かず、シュートをすることができない。でも、パスが通ったり、一度シュートができた時には達成感を感じ、楽しいという気持ちで溢れていた。

体験をした後、選手達のプレーを生で観ることができた。もちろん、車椅子が激しくぶつかり合っていたり、たくさんシユートが決まって面白い。しかし、それ以上に選手一人一人がとても楽しそうにプレーをしていたことが印象に残っている。

また、車椅子バスケットについて調べていたところ、最近は「障害者のみ」のチームだけでなく、「健常者のみ」や、「障害者のチームに健常者が加わる」チームも増えていて、段々普及しているという。この様なことや自分の体験から私は、スポーツを楽しむことについて、障害の有無は関係ないのだと思った。車椅子バスケットに限らず、共に戦うことのできるものはたくさんある。また、競技やルールは違っていても、時に苦しんだり、達成感を味わったりする気持ちは全く一緒だからだ。

私達は、自分と違っていると、抵抗感を抱いてしまうかもしれない。でも、私が大切だと思うのは、その抵抗感を打ち消すことだ。それは、決して難しいことではないと思う。共に関わり合うことで、自然とお互いを認め合えると思う。その「関わり」のきっかけの一つとして、スポーツがある。スポーツを通して、同じ気持ちを共有したり、心を一つにし、障害という壁をなくしていきたい。そして、皆が幸せに過ごすことができる社会になれば良いと思う。

二〇二〇年には、東京オリンピック・パラリンピックが待っている。私は、「観る」という形で関わり、少しでも、貢献できるようになればいいなと思う。

いじめをなくそう

横浜市立港南中学校 一年

黒瀬亮太

僕は、いじめの被害者になった事があります。

それは、僕が小学校三年生の時におきました。

特定の男子がつねったり、休み時間に追い回したり、下校時に止めて帰るのをじゃましてきたりするなど、毎日続けてされました。

僕は、相手に何もしていないので、なんで意地悪な事をされてしまうのか、心当たりがありませんでした。つねられるたびに、「やめて。」と、言葉で伝え続けましたが、相手は笑いながら「つねってないよ。」と言って、ごまかしながら、つねることをやめてくれないので、とても悔しい思いをしました。つねる所は、背中や、腕で、洋服で隠れる場所を狙われていたので、周りの人にはばれないようにやっつけていて、ひきょうだなど思いました。つねられた所は、黒くあざになってしまうので、それに気付いた母は、とても悲しんでいました。

七月の初めの休み時間に、とても強くつねられた所が、大きなあざになり、保健室で手当してもらいました。それをきっかけに、先生に、今までの出来事を話すことができました。

先生と、いじめをした人たちと僕で、話し合いがありました。その時の先生の言葉で忘れられないのは、「先生は、君たちのやった事を許しません。」と、真剣な顔ではつきりと言った場面です。僕は、謝ったら許すと思っていたので、その時は意外でした。でも、今なら、許さないと言った意味がよく解ります。

僕も、いじめは絶対にしてはいけないことだと思うからです。いやなことをされるのはとても辛いし悔しいし悲しいからです。ふざけていたというのは言い訳にならないと思います。人の心も体も傷つけてはいけないことを、先生は伝えたかったのではないかと思います。

自分の力では解決できない時は、親や先生に相談することも大事だと思います。

僕は、相手が傷つく言葉を言ったり、からかったり、暴力をふるうなど、人がいやがる事を楽しそうにやる人たちがいる事が不思議です。

この夏休みに「君たちはどう生きるか」という本を読みました。この話の中にも、いじめが描かれています。作者の吉野源三郎さんは、本のはじめに、『だれもかれもが力いっぱいのにびのびと生きてゆける世の中だれもかれも「生まれて来てよかった」と思えるような世の中じぶんを大切にすることが同時にひとを大切にすることになる世の中』と直筆で書いていました。僕もそういう世の中になれば、いじめは存在しなくなると思っています。

人には、それぞれ生まれて来て良かったと思うことが違います。人の個性を尊重して、みんなが幸せに生きていけるように、優しい心をもつ人がたくさんできると良いと思います。

外国人だった私

横浜市立田奈中学校 三年

五十嵐 萌々夏
いがらし ももか

日本にはたくさんの方々が生活している。彼らが何かに戸惑っている時、私はいたたまれなくなり、何か手助けができないかと強く思う。なぜなら、数ヶ月前まで私自身がドイツで外国人として、必死に暮らしていたからだ。

小学六年生の冬、初めての外国暮らしに胸をふくらませていた私だったが、当初から、屈辱を味わうことになった。渡独した時、同じ日系の飛行機に乗ってきた日本人達は、入国審査のゲートをすいすいと通過していった。しかし、私たち一家が旅行客でないとわかった途端、入国審査官は流暢に話していた日本語をびたりと止め、ドイツ語で怒鳴りだした。私はおびえるばかりで、彼が何を言っているのか分からなかったが、たまに居合わせたドイツ語が分かる日本人が、「なぜビザを持っていないんだ。なぜドイツに住むのにドイツ語が話せないんだ。と言ってますよ。」と教えてくれて、ようやくその剣幕を理解することができた。実際、父のワーキングビザがあれば家族は入国できるし、家族のビザは入国後にとればよいことになっていたのだが、とにかく私たちはひどく怒られたし、何も言い返すことができなかった。

他にも地下鉄の定期券を買う時、英語では相手にもされず「また明日来て」と追い返されたし、地下鉄内で

検札の人とやりとりする時には「ここはドイツなんだからドイツ語で話して。」とぴしゃりと言われた。日本であたり前のように出来ていた生活はスムーズにいかなくなり、一つ一つのハードルは途方もなく高く感じられた。そして、自分たちは他所者よそもなのだと思いますをえなかつた。

そのような出来事が重なり、私はストレスを感じていたが、一方でその国の言葉を使うことの重要性にも気付くことになった。私が英語ではなく、ドイツ語を話した方が、どのドイツ人も喜んでくれたし、親切にしてくれた。言語にはその国の文化や習慣が色濃く反映されており、その国の言葉を学ぶことは、その国や民族を尊重することにつながるのだと思った。このことをきっかけに、私はドイツ語をよく勉強するようになった。

また、ドイツでの暮らしに慣れた頃、こんな出来事に遭遇した。スーパーのレジで、英語圏の旅行者が当たり前のように英語で何かを言っているのだが、まるで相手にされずに怒っていた。後ろに並んでいた私は、確かに英語は世界の公用語ではあるが、せめて、ドイツ語が話せなくてごめんなさい、とレジのドイツ人に言うべきだと思った。と同時に、自分が渡独したばかりの頃を思い出して、恥ずかしくなった。

現在、ドイツには多勢の移民がいる。彼らは居住するために、一定レベル以上のドイツ語の習得が義務付けられている。生きていくために、皆必死でドイツ語を勉強する。幸いにも、私は日本人という理由で差別されたと考えたことはないが、言葉がうまく話せなくて辛い経験はたくさんした。今、日本に戻ってきて私が見かける外国人達は、ヨーロッパで見ていた彼らとは違い、慣れない日本で戸惑っているように見える。私は、日本語が話せる外国人はすごいと思うし、よく話せない人には積極的に声をかけ、喜んで力になりたいと思う。また、それは彼らの人権を守ることにつながると信じている。そのためにも私は日々、語学を頑張りたい。そして、日本で暮らす外国人が、日本を好きになってくれるよう、彼らの役に立ちたいと決意している。

言葉の杖

横浜市立十日市場中学校 三年

佐々木 あおい

私の曾祖父は耳が聴こえにくく、話をする際にはなるべく近づいて大きな声で言わなければなりません。それでも聴こえないときがよくあり、その頻度は会う度に増えています。曾祖父と会うのは年に二回程で、来たときに一言、帰るときに一言挨拶をするくらいでした。

「久しぶり」「またね」

特に違和感を覚えることもなく、この二言だけを毎年重ねてきました。

ある年のことです。いつも通り曾祖父に「来たよ」と一言声をかけ、部屋を後にしようとして襖障子を振り返ったとき、「おじいちゃん元気？」と大きな声で言いながら曾祖父の部屋へ弟が駆けて来ました。初めは聴き取れなかった様子の曾祖父も、何を言われたのか理解すると嬉しそうに微笑んでいました。それから二人の間にはほんの少しの会話だけで場が和んでいる様子を見て、なんだか居たたまれない気持ちになりました。今まで何度も同じことを繰り返し返す会話にうんざりしていた自分と、何も気にせずただ無邪気な笑顔を振り撒く弟とを比べてしまったからです。自分から関わろうとしなかった。それは耳の悪くなった曾祖父を「お年寄りだから仕方がない」と勝手に結論付け、否定する考えへと、知らない間に進んでいたのかもしれない。仕方がない

と片付けるのではなく、自分から向き合ってみることが大切なのではないかと、このとき思いました。

「元氣？」

同じ一言がこんなにも大きな差を生むことを初めて知りました。

言葉一つで相手を喜ばせることができるのなら、楽しい人生の手助けをしているということ。つまり、その一つが相手の人生を壊したり支えたりすることができるのだと、思っています。

相手を気遣える人は、相手を尊重できる人。相手を尊重できる人は、相手を気遣える人。もし本当にそれが成り立つのなら、今私は二つのことを大切にしたいと思っています。

一つめは、「寄り添う」ということです。相手のことを考え、知る。これが第一歩になると考えました。

二つめは「向き合う」ということです。第一歩を踏み出したなら、次は話し、また知る。この繰り返しですが二歩、三歩へとつながるのではないのでしょうか。難しく言い換えれば、人権について考えた一つの結果です。

私は寄り添うこと、向き合うこと、そして何より相手との時間を楽しむことを大切に、例に挙げた曾祖父や身近な人たちと接していきたいと思います。そして経験の中から学んだこととして、ときには本音、またときには気遣って「支える言葉」を選べるようになりたいと思いました。

Change the world

横浜市立あざみ野中学校 二年

生しょう野の茉ま椰や

私は、ハンガリー人の父と日本人の母をもつ十四さいのハーフです。ハンガリーは、ヨーロッパの真ん中のほうで、音楽の都ウィーンがあるオーストリアの隣にあります。これは私の人生の話です。

私は生まれてからずっと、日本に住んでいます。家での会話も父が日本語がペラペラなため日本語です。そのため、父の母国語であるハンガリー語も挨拶程度でしか話せません。そして、髪もクルクルで茶色っぽく、目も少し緑がはいった茶色、体形もみんなと違ってガッチリしている。そんな日本人離れしている自分がコンプレックスで、友達に、「髪クルクルでいいな。」や「目の色きれいだね」などを言われると、どんどん自信がなくなっていく、自分のことが大嫌いになっていきました。でも、それより傷ついたことは、理解してくれないことでした。例えば、外国の血がはいっているから日本人じゃない。ほかの子たちと見た目がちがうからという理由でいじめられたり、保育園の時は「お前は将来デブになる」や「将来結婚しても離婚する」などの意味のわからないことを言われた時もありました。でも、先生に相談をしても絶対この気持ちを理解してくれない。それがあって、家族以外には相談できず、小学校低学年ごろは、「学校にいきたくないな。」そんなことを考えながら毎朝通っていました。母にも「無理しなくてもいいんだよ。行きたくないなら行かなくてもいい

よ。」こんな言葉もいわれながらも頑張つて通っていました。その時は、福岡の田舎のほうに住んでいて、あまりハーフや外国人はいないのでめずらしがってそんなことがおきてしまったんだ。今はそう思えます。

でも、そんな自分が好きになれたのは、二度の転機があります。

一つが、小学四年生の夏でした。私は父の転勤で横浜にきました。正直、「またあんなことあったらどうしよう」や当時まだバリバリ博多弁だった私は、「方言、大丈夫かな」と思いながら、初登校日を迎えました。でも、そんなことはなく、クラスメートはあたたかくむかえいれてくれました。その時はとても嬉しかったです。一ヶ月ぐらいうると、博多弁はしゃべれなくなりましたが、小学校生活最後までとても楽しむことができました。

そして、二つめが中学校の部活で始めた剣道です。きっかけは、小学四年生の秋に始めた空手でした。私はそれが楽しくてしょうがなく、中学校では何か新しい武道をやりたい。そう思い始めました。最初は、親にとっても反対されましたが、しつかり部活と学業を両立していく、そういう条件が続いています。最初はあまりできず、大変な部分もありましたが、練習を積み重ね、大会でもベスト十六や入賞したこともありました。その一番の強みとなったのが、ガッチリとした筋肉質の体と空手で鍛えた握力でした。一番のコンプレックスだった二つが活かしたのは、嬉しかったです。

他にも、ハーフでよかったなと思うことはたくさんあります。例えば、外国に友達ができたり、世界のいろいろなことが知れます。確かに、みなさんとは少し育った環境が違います。ですが、一人の日本人として。一人の人間として。一人の皆さんと一緒に住む地球人として。皆さんに理解してもらいたいです。

こんなふうに、私は「ハーフでよかったな」と思う瞬間や、たくさんのいい友人にめぐまれました。でも、

まだ、この世の中には、私と同じように「ハーフだから。」そういう理由でいじめや差別で苦しんでいる人がいるかもしれません。もし、そんな子を見かけたら、ほかの人たちと一緒に便乗するのではなく、声をかけてあげたりして、少しでもこんなことで悩んでいる人が減っていったら嬉しいです。私は少しでもこんなことで苦しむ人を助けてくれる人。その子達を支えてくれる人が増えてほしい。世間や他人の意見や考え方にとらわれて、人をいじめたり、悪口を言ったりする。そんな人が少しでもいなくなっしてほしい。これを読んで、そんな人が増えてくれたらいいな。そう思っています。

認知症の方と接すること

横浜市立山内中学校 二年

中^{なか}川^{がわ}琴^{こと}美^み

私の祖母は認知症だ。私が小学校の高学年になって発覚した。ある日、家族で夕飯を食べているときに、父が「おばあちゃんが認知症かもしれない。」と言った。それをきいたとき、「私の名前、忘れられちゃうのかな。」「おばあちゃんがなくなったらどうしよう。」と心配で、とてもこわかった。

それから時が経つにつれて、祖母の認知症の症状は重くなっていった。祖父母の家に遊びに行くと、祖母の失敗に祖父はいつも怒っていた。それでも、いつも祖父母は私達が家族で行くと、とても楽しそうにしてくれた。しかし祖母は私の年齢が思い出せない。

「ことはもう五年生か？」と言われた。私は六年生なのに。「違うよ、六年生だよ。」つい無愛想に言ってしまった。忘れられてしまっているんだと、少し悲しかった。それからも無愛想な態度をとってしまうことはよくあった。

だんだん症状が重くなり、祖父の介護疲れも限界に近くなったころ、父が言った。

「老人ホームを探そう。」と。

私は、少し田舎だけど、のどかな場所にある祖父母の家が大好きだった。だから、とても悲しかった。今思え

ば、父にとつても、実家を手離すことになるのだから、さみしかっただろう。しかし祖父母を守るためにはし
かたなかった。

それから、様々な手続きを終え、祖父母は私の家の近くにある老人ホームに入居した。二人の部屋は別々だ
が向かいの部屋で、すぐに会えるようになってあった。私も、部活がない日などは祖父母に会いに行った。ある
日、「あら、なんて言っただけね、あの子。」祖母が私に言った。とうとう私の名前も忘れられてしまったのだ。
とても胸が苦しくなった。顔は笑っていたが、心は今にも泣き出しそうだった。そんなとき、父が言った。

「さあ、何でしょう?」

まるで、クイズ番組かのような明るい声で言った。私は一瞬戸惑ったが、やがて分かってきた。私だけ暗くて
悲しいのではない。祖母もきつと、思い出せなくて悲しいに違いない。だから、みんなで明るくすれば良いの
だと。そして、私も続けて言ってみた。

「さあ、何でしょう。」祖母は考えこむ顔をした。「何だったけなあ。まきじゃないし、たまみじゃないし。」
祖母が思い出せなくても、だれも怒らない。みんな「さあ何だ?」と笑顔で問う。祖母は、明るい人で、少し
困ることもあるけれど、祖母といると、みんなが明るくなれる。私はそんな祖母が大好きだ。

今、社会では高齢者が増え、認知症の方も増えている。時には介護疲れで殺してしまうという暗い事件もあ
る。しかし、そんな暗い事件を減らすために、認知症の方を理解する必要がある。認知症の方は、一度きいた
ことでもすぐ忘れてしまう。だから、同じことを何度も繰り返してきくかもしれない。でも、そんなときに、
まわりが理解していれば、優しく教えることができるはずだ。優しく教えることさえできれば、本人もまわり
も不快にはならない。逆に冷たく接してしまったとする。もしそうになると、認知症の方はきつと悲しく思う。

そして、介護する方は、イライラがたまり、爆発してしまうことも考えられる。そんなときに認知症の方を理解して優しく接することができればお互いに嫌な思いをすることは減らせるはずだ。認知症は防ぎたくても防ぎきれない。だからこそ、病気を理解して優しく接することを心がけていきたい。少しでも暗い事件を減らすために。

子供が笑顔でくらせる社会

横浜市立汲沢中学校 一年

中嶋

優

「Hi, Yu!」

ぼくがフィリピンのマニラに住んでいた頃よく行くラーメン屋の店員さんは、ぼくの名前を覚えてくれていて、いつも明るく笑顔で迎えてくれました。

ぼくは、小学校一年生から三年生まで、お父さんの仕事の都合で、家族でフィリピンに住んでいました。

そのラーメン屋の店員さんは、ぼくが行くと、一緒に手遊びをしてくれたり、お店の中を探検して、ラーメンを作る所を見せてくれたりして、ぼくはとても楽しかったです。他のお店でも、店員さんは子供に優しく、歌をうたってくれたり、話しかけてくれました。

ぼくはフィリピンの人達は、子供が本当に好きで子供を大切にしよう、という気持ちが強いんだな、と感じました。なぜかというところ、ぼくに接するときのフィリピン人の顔がいつも笑顔だったからです。

反対に、日本では、レストランに行っても、子供が少し大きな声で話をしていて、周りの大人から冷たい視線を感じることがあります。また、日本では、電車の中で赤ちゃんが大声で泣いていたら、赤ちゃんをベビーカーにのせたお母さんが周りの大人から無言でにらみつけられているのを見たことがあります。そのお

母さんは、周りの大人に「すみません。すみません。」と謝りながら申し訳なさそうな表情で、あせって赤ちゃんをあやしていました。ぼくはそれを見て、とても悲しい気持ちになりました。

どうして日本では、赤ちゃんのお母さんが謝まらなくてはいけないのだろうか？フィリピンにいたとき、ぼくのお母さんは、いつも笑顔でした。それは、ぼくが泣いたときでも、それをせめる人が一人もいなくて、周りの人は、ぼくに笑顔で話しかけてくれて子供たちを楽しませようとしてくれていたからだ、と、ぼくは気がきました。

ぼくはこのことから日本では、子供とそのお母さんの人権が軽く見られているんだな、と感じるようになりました。

ぼくは、最近、日本のニュースで、赤ちゃんの「泣いてもいいよ」ステッカーを配布する取り組みがある事を知りました。そのステッカーは、公共の場所での赤ちゃんの泣き声に寛容になろう、という、お母さんの心理的負担を和らげよう、という目的で作られたそうです。

それを見たとき、ぼくは、このステッカーが必要なほど、やはり日本では子供の人権が軽く見られているんだな、と思いました。

ぼくは、子供が楽しくくらせる社会は、その子供を育てるお母さんにとってくらしやすい世の中だと思います。

ぼくがフィリピンで感じた、子供を大切にする気持ちを、日本人が持つことができれば、子供の人権への意識が高くなって、子供を育てるお母さんがもっと伸び伸びと、周りの人の力をかりて子育てがしやすくなり、子供もお母さんも笑顔になる社会が出来ると思います。ぼくは、もっと子供に目を向けることで日本は、変わ

ると思っています。

今度、電車で、赤ちゃんが泣いていたら、赤ちゃんとお母さんに笑顔で接してもらいたいと思います。一人
一人が、子供の人権への意識が変われば、子供がくらしやすい社会になっていくと思います。

つなげよう、五輪の輪。

横浜市立十日市場中学校 三年

名^な波^{なみ}春^{はる}乃^の

来年、東京パラリンピック・オリンピックが開催されます。私はバスケットボールの選手が日本に集まり、試合をすることを楽しみにしています。自国での開催は生まれて始めてなので、パラリンピック・オリンピックに今まで以上に親近感をいだくと共に、自分自身ボランティア等で何らかの形で関わりたいなど、夢をふくらませています。

世界には約二百の国があります。つまり、来年日本には約二百の国から宗教・文化・言語・マナー、数えきれない程の違いを持つ人が訪れるのです。ではいかにして多数の国の人々の違いを受け入れるべきでしょうか？そんな矢先、叔父の父にあたるアフガニスタン出身のジャリリさんと我が家で食事をした時の事です。母が料理を作りお皿に盛りつけていると品数の少ないお皿があったので私は「このお皿におかずが足りない。」と伝えました。すると母は「ジャリリさんはイスラム教で豚肉を食べてはいけないの。」と言いました。私は宗教の違いだけで食事を制限されるのを見るのは、初めての経験でした。母は幼い頃から私に「よそのお家におじゃました時に食事を食べなかつたり、残すのは失礼よ。」と言い聞かせていたのでつい、「人の家に来た時くらい、宗教なんか無視してご飯を食べればいいのにね。」と母に言いました。それを聞いた母は、「それとこ

れとは話が別なの。宗教はね、自然の力や人の力をはるかに越えた存在で、その人の価値感を形造るものなの。つまり、信者にとつて宗教を守らないことは自分の存在を打ち消すのと同じことなの。」と教えてくれました。私は自分の価値観で、ついついひどい事を口にしてしまった事を反省しました。

来年開催されるパラリンピック・オリンピックでは沢山の国、そして様々な違いを持った人々が日本に集まります。私の様に自分本位の価値感で世界の人々を見てしまうと、本来のその人達の姿を見失ってしまう、と思われました。そして、それと同時に「そんなことはあつてはならない。」と感じました。改善するのに必要なことは、各国の情報を知ることなのではないか、と考えました。しかし、改めて考えてみると多数の参加国の情報を知ることがは無謀であることに気がつきました。

では、私は満足に言葉の通じないジャリリさんどどのようにコミュニケーションをとっているのか思いだしてみました。私とジャリリさんでテレビでニュースを見ていた時、日本語のニュースを見ているの分からなくてつまらないだろうなと思った私は、つたない英語と見ぶり手ぶりで一先懸命説明をしました。すると、最初は首を傾けていたジャリリさんも質問を返してくれ、理解し合うことができました。このような、互いの「伝えたい」「知りたい」という気持ちがお互いにコミュニケーションを生み、相互の理解が進むのではないか、と思いました。そして、その根幹には、考えや習慣の違いがあつたとしても、その違いを認め尊重しようという事が存在することが前提です。その上で、一人一人が考えていかなければなりません。

私には、ずっと忘れられない大好きな詩があります。金子みすゞさんの「私と小鳥と鈴と」です。その中の一節の「みんなちがって、みんないい。」という素てきな言葉があります。まさに、この詩のように誰もが違いを認め合えれば違いがある事をほこらしく思えてくるのではないのでしょうか。皆が同じ世の中では、少しば

かり退屈です。様々な違いがより、世界を豊かにしてくれているのだと思います。

日本は島国で、他国の人々と交流できる機会がとても少ないです。だからこそ、来年の東京パラリンピック・オリンピックをきっかけに自分たちの常識の殻を打ちやぶり、人とつながり、違いを理解し、認めあい、各国のあらゆる人々が五輪の輪のようにつながっていけると良いと思いました。そして、パラリンピック・オリンピックで違いの素晴らしさを体感し他国へ発信していくのも開催地になった日本の使命です。違うということが、多国間の絆を深め、より一層強い輪をつくりあげると信じています。

一人の人間

横浜市立もえぎ野中学校 三年

馬場咲帆

ここ数年、町で外国の方を見かけることが多くなってきました。外国の方がいることに驚いたり避けたりする人は少ないし、彼らも日本になじんでいるように見える。

ある日私は、外国の方を見た数人の小学生が、

「うわ。外国人じゃん。」

と言って走り去っていく姿を見た。小学生は正直だ。特に低学年の子どもは、思ったことをすぐ口にしてしまう。また、親が言っていることにも影響を受けやすい。彼らの親は、何か外国の方を馬鹿にするようなことを言ったのだろうか。もしそうならば、日本人の大半が、外では口に出さないだけで、外国の方を苦手に思っているのだろうか。なぜ、日本人は外国の方に苦手意識を持っているのだろうか。

私は、二歳から四歳までの間、父の転勤でオランダに住んでいた。私は日本人幼稚園に通っていたが、兄と姉はインターナショナルスクールに通っていたので、外国の方とはよく会ったし、片言の英語で話すこともあった。私の幼稚園では英語教育に力を入れており、日本語については何も教わらなかったため、私は日本語の読み書きができなかった。

ある日突然、「日本に帰ることになった」と母から告げられた。当時、私の中での一番古い記憶はオランダのことだったので、日本のことを何一つ知らず、とても不安だった。帰国後、日本の幼稚園に初めて行った日、みんなからたくさん話しかけられた。「意外と大丈夫かもしれない」と思った。しかし、日本語の読み書きができない私は、すぐにかかるたや絵本などのみんなの遊びについていけなくなった。頑張って文字が読めるようになって、仲間に入れてもらえなかった。「どうして」と聞いたとき、ある女の子が答えた。

「だって咲帆ちゃんは外国人なんでしょ？ 私たちのことを馬鹿にしてるって、お母さんが言ってたもん。」

私は日本人だし、彼女たちを馬鹿にしたこともない。彼女の母親はもう少し違う言い方をしたのだろうが、そこに敵意があったことは明らかだ。私はこのとき、「人は自分と何が違う人が苦手で、怖いのだ」と思った。その後彼女たちとは仲良くなったが、私は今でもあのときの彼女の言葉を忘れることができない。

先日、公民の授業で「異文化理解」という言葉が出てきた。私たちは試験のためにこの言葉を覚えても、実際に活かそうとはしない。それは、異文化理解に対する実感がわからないからだと思う。私たちは心のどこかで、「外国人は遠い存在だから」と思っていないだろうか。「普段は会ったり話したりしないから、自分には関係ない。だから何を言っても大丈夫。」このように思ったことがある人もいるだろう。しかし、それだと外国の方を傷つけてしまう。差別をなくすためには、外国の方に対し、「外国人」とまとめてではなく、一人ひとりと向き合うことが大切だと思う。民族には関係なく、誰に対しても一人の人間として接し、相手の立場に立って考えて行動することこそが、私たちにできることではないだろうか。

人の心

横浜市立旭北中学校 三年

村上 はるか

「いいなあ。乗そう。私も乗りたい。」

友達が時々、車いすに乗っている人を見かけると、そう言います。私はその時、口にはしませんが、祖母のことを思い出します。

祖母は五年くらい前から、車いすでの生活を送っています。そして一年半前、ALSという、身体の自由を失う病気だと診断されました。この病気は難病で、これからも治る見込みはありません。

祖母の介護のため、私たち家族は、二年半前に引越をし、同居をしています。私は転校するのが、嫌で大反対しましたが、親には「しょうがない」と言われました。

祖母と一緒に暮らしてから、何度か車いすを替えました。乗りにくい車いすだったそうです。

「車いすは楽じゃない。」

と、祖母が言ったことがあります、私はその言葉が心にささっていました。

「車いすは、歩ける人が乗するためのものじゃない。身体が不自由な人が、なんとか生活するためにしかたなく使っているものなんだ。」

と、私は気付きました。祖母は起きている時は、座っていますが、自分で体を動かすことはできません。お風呂は、訪問介護の人に入れてもらっています。外出する時には、祖父が車いすを押しています。

また、この前、デパートに行った時のことでした。若い男の人達が、デパートに置いてある車いすを使って、大きな声を出して遊んでいるのを見ました。私はその時、怒りが一気にこみ上げてきました。

「なんで、車いすで遊んでいるの。車いすは遊ぶために置いてあるものじゃないのに。」
と思いました。

私の祖母は、車いす生活はつらい、苦しい、といつも言います。それもそのはずです。長時間、体を動かさないまま、座っているのはとても苦しく、つらいことです。車いすに座りたくて座っているわけじゃないし、歩きたいのに歩けないのです。それを軽く見て楽をしていると思う人が世の中にはたくさんいます。分からないくても、感じようとすることが大切だと思います。

私も、中学一年生の時に股関節をけがして、三カ月くらい、松葉杖をついていたことがあります。普通に歩きたくても歩けない。特に坂や階段を登っている時は、転びそうになり、大変でした。その時、祖母の気持ちをすごく分かることができました。

車いすに乗っている方々だけではありません。ほかにも、障がいを持っている人が世界にはたくさんいます。そのような方を馬鹿にしたり、悪く言う人たちもいます。一人一人、人として心をもっています。自分は障がいをもっていないなくても、自分より苦しんでいる人がたくさんいるという事を忘れないでほしいです。

私は祖母の事で相手の身になって考えることができるようになりました。祖母の病気はもう治る可能性は低いのですが、少しでも良くなる事を願って、自分にもできることをやっていきたいと思っています。

障害者の気持ち

横浜市立新田中学校 一年

盛もり田た 吟ぎん

障害がある人の気持ちについて考えてみました。僕は足が悪いです。小さな頃は普通に歩いてきたから、障害がある人の気持ちも障害がない人の気持ちも両方わかります。

中学生になり、あまり遠くまで歩くことができなくなりました。足が動かなくて大変だけど学校では、嫌な思いをすることがありません。それは、先生や友人が助けてくれるからです。

しかし、道やお店ではちがいます。周りの人がじろじろ僕を見たりマネされたりします。そんな時は、すごくイライラするし嫌な気持ちになります。もう歩きたくなくなります。

僕は、少しでもちゃんと歩けるようにリハビリをがんばったり、痛い治療にもたえています。日本中の人が障害のある人の気持ちをわかってくれたら、きつとみんなが幸せで、楽しい世界になると思います。

また、僕と同じような障害のある人がいたら、助けてください。困っている人や大変そうな人がいたら、声をかけたいです。そのためには、相手を知ること。優しい気持ち。仲良くできる力が必要だと思います。

最近、車イスをよく使うようになりました。車イスに乗っていると困ることがたくさんあります。ちょっとした段差も通れなかったり、階段があり進めなかったり。歩道にたくさん自転車とまっている時も、車イス

で通れず困ります。段差をなくし、階段のとなりにエレベーターがあればいいのに。といつも思います。僕は、車イスで困っている時に声をかけてもらったり、助けてもらったことが一度もありません。それは、とても悲しいことです。

車イスで困っている時に助けてもらえないのも、町で僕がじろじろ見られるのも、きつと障害者になれてなかったり、障害がある人の気持ちが変わらないからだと思います。障害がある人もみんなが仲良くできる世界。友達が困っていたら助けてあげるのがあたりまえのように、障害がある人が困っていたら助けてあげるのがあたりまえな世界にしたいです。そのために、今僕にできることを一生懸命にがんばります。

災害とプライバシー

横浜市立仲尾台中学校 二年

米よね 満みつ 仁のり 紀とし

「いやーまた全国ニュースに写されてしまったー」

僕のお父さんの生まれたのは、熊本県の益城町という所です。空港がある町で熊本市内から車で三〇分くらいです。九州には、毎年のように大きな台風がきます。良子おばちゃんの家は、農業で家のまわりはとても広い田んぼです。だから台風が来て雨が降り続けると大きな湖の真ん中に家がポツンと取り残されているように見えてしまいます。そうなるとテレビカメラ的には、いかにも大きな台風が来て大変なことになっています！という感じが出る様で、台風のためにテレビカメラが取材に来ます。写していいですか？と聞く暇もないし、避難している時もあるので、遠くから家だけ写された場合は、許可を取りに来てくれたことはないそうです。良子おばちゃんの孫で三歳の女の子が、いとこに抱かれて、自衛隊のゴムボートで救出された時は、テレビカメラがずらりと並んで待っていたそうです。毎回毎回おばちゃんは、テレビに写されてしまったことを気にしていました。災害だから仕方ないのかもしれないけど、もし横浜に大きな災害があつて、そのたびに断りもなく自分の家や家族が写されたら、いやだろうなと思います。

そして今から三年前、益城町に大きな地震が発生しました。お父さんの実家も半分以上壊れてしまい、実家

を継いでいたおじさん一家は、今でも、家族離れ離れに暮らしています。一番大変だったのは、避難している時、小さな町の中がマスコミだらけになり、余震が怖いので車で寝ているとテレビカメラが来て感想を聞かれて寝ていられなかったそうです。長い避難生活でくたびれた顔を写されたくないのに、益城の町の人みんないい人なので、丁寧に答えてあげたみたいです。さっきの農業のおばちゃんと別の、久美子おばちゃんの実家は全壊してしまいました。ちょうど町の中心部だったので、毎日毎日あちこちのテレビ局が取材に来て、これからどうしようかと絶望的な時に、何回も同じ事を聞かれていかげん頭に來たと言っていました。

マスコミの人たちも、わざわざ來たからには、それなりの画像を写さないと困るのは僕も理解しています。全国に大変な様子が放送されることで寄付も集まって、町を立て直す役にたてるかもしれません。でも、もう少し気をつかってほしいと思います。

去年、やっと熊本に行けて親戚のみんなから聞いた話では、本当に言いたいことよりも、マスコミの人達が求めているストーリーに沿って答えて欲しいのが分かったと言っていました。僕のお父さんは、地震の後、車に食料などを一杯積んで熊本に行ったら、テレビで見て想像していたのとは、かなり違って見えて驚いたそうです。全壊の家や道路のひび割ればかり強調されてたけれど、外から見てもそれほどない家ほど深刻な被害だったのに、ほとんど報道されてなくて本当に必要な支援が受けられないと心配していました。

ネットでは、役に立つ情報もあったけど、わざとデマを流したりして熊本の人が大変なのに、面白がる人が許せません。

マスコミには、もしも自分の実家が同じように災害にあったらと考えると取材してほしいです。ネットで情報発信する人も災害にあった人の役に立つようにしてほしい。災害にあった人々のプライバシーについて、もつ

と話し合っていていいと思います。そして僕も、報道されたことだけを信じないで、災害にあってしまった人々のプライバシーと気持ちを大切に、皆んなにも伝えたいと思います。

参加校紹介(137校)

■横浜市立
〔鶴見区〕

〔神奈川区〕

〔西区〕

〔中区〕

市 鶴見 末吉 市場 鶴見 向 矢の宮 浦島 栗田 六角 神奈川 松本 錦台 菅田 盲特別支援学校 老松 岡野 西野 軽井沢 大港 仲尾台 横濱サイエンスフロンティア 高等学校附属中学校 高等学校附属中学校 浦島丘 栗田谷 六角橋 神奈川 松本 錦台 菅田 盲特別支援学校 老松 岡野 西野 軽井沢 大港 仲尾台

〔南区〕

〔港南区〕

〔保土ヶ谷区〕

本牧 横濱吉田 共進 平楽 蔦田 永南 藤の川 六ツ 藤の川 野庭 笹下 野庭 港南第一 芹が谷 日限山 丸山台 東永谷 南高等学校附属中学校 岩崎 保土ヶ谷 宮田 岩井原 上菅田 新井 本牧 横濱吉田 共進 平楽 蔦田 永南 藤の川 六ツ 藤の川 野庭 笹下 野庭 港南第一 芹が谷 日限山 丸山台 東永谷 南高等学校附属中学校 岩崎 保土ヶ谷 宮田 岩井原 上菅田 新井

〔旭区〕

〔磯子区〕

〔金沢区〕

鶴ヶ原 万騎が原 希望が丘 上白根 左近山 都岡 南希望が丘 今宿 本宿 若葉台 旭北 岡村 汐見台 洋光台第二 金沢 六浦 大道 西柴 富岡 富岡 西金沢学園 鶴ヶ原 万騎が原 希望が丘 上白根 左近山 都岡 南希望が丘 今宿 本宿 若葉台 旭北 岡村 汐見台 洋光台第二 金沢 六浦 大道 西柴 富岡 富岡 西金沢学園

〔港北区〕

並木中学校
釜利谷中学校
小田中学校
城郷中学校
新田中学校
日吉台中学校
大綱中学校
篠原中学校
樽町中学校
日吉台西中学校
新羽中学校
高田中学校
田奈中学校
中南山中学校
十日市場中学校
鳴居中学校
霧が丘学園
東鴨居中学校
山内中学校
谷本中学校
青葉台中学校
みたけ台中学校
美しが丘中学校
すすき野中学校

〔都筑区〕

奈良中学校
緑が丘中学校
もえぎ野中学校
あざみ野中学校
鴨志田中学校
市ヶ尾中学校
あかね台中学校
都田中学校
中川中学校
茅ヶ崎中学校
荏田南中学校
中川西中学校
中山中学校
早淵中学校
大塚正中学校
戸塚中学校
舞岡中学校
境木中学校
豊田中学校
汲沢中学校
名瀬中学校
深谷中学校
秋葉中学校
南戸塚中学校

〔栄区〕

〔泉区〕

本郷中学校
上郷中学校
桂台中学校
西本郷中学校
飯島中学校
小山台中学校
岡津中学校
中和田中学校
泉が丘中学校
上飯田中学校
いずみ野中学校
領家中学校
瀬谷中学校
南原中学校
東瀬谷中学校
下瀬谷中学校

〔緑区〕

〔戸塚区〕

〔瀬谷区〕

〔青葉区〕

■その他

関東学院六浦中学校
横浜共立学園中学校
横浜国立大学教育学部附属横浜中学校

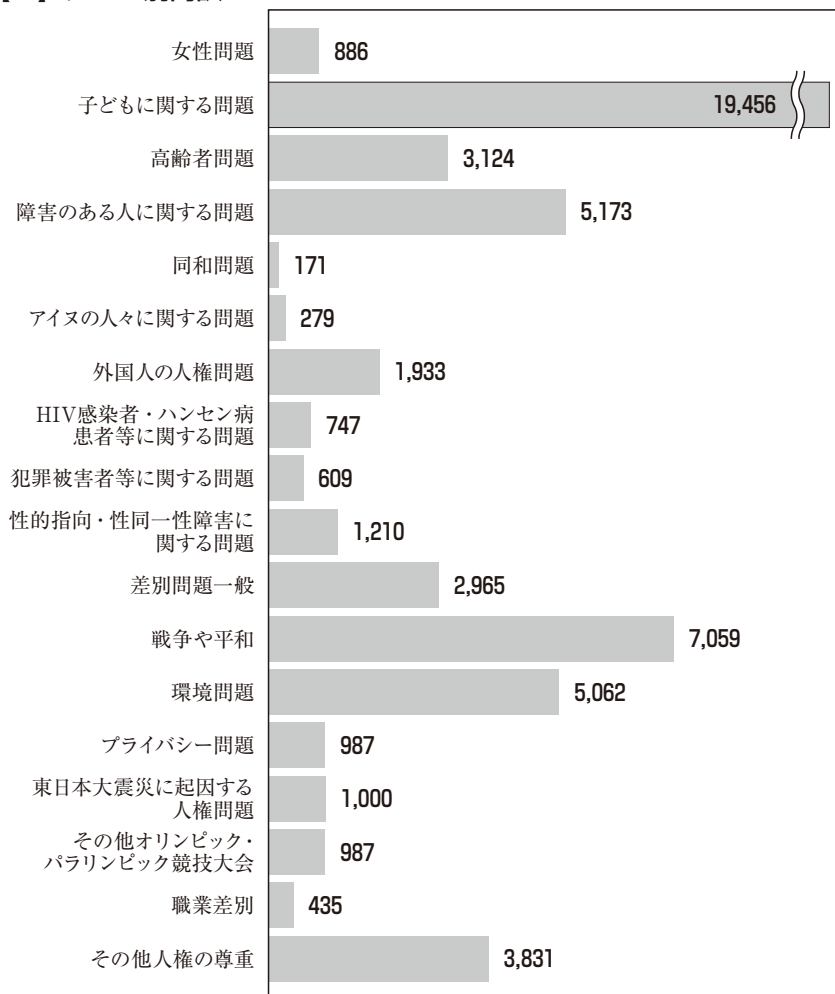
ご協力ありがとうございました。

● 応募状況

【1】推 移

年 度	平 成							令和
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度
応募校数	143	141	143	144	140	139	139	137
作 品 数	55,824	58,016	58,487	60,721	60,209	59,193	56,040	55,914

【2】テーマ別内訳



●令和元年度全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会

〈第一次審査員〉

横浜市立中学校教育研究会国語科部会 25名

〈第二次審査員〉

横浜市教育委員会事務局指導主事 10名

〈最終審査員〉

横浜人権擁護委員協議会会長	小林	千恵子
横浜市人権擁護委員会第一ブロック委員	細谷	サユリ
横浜市人権擁護委員会第二ブロック委員	松本	眞純
横浜市人権擁護委員会第三ブロック委員	金子	恵子
児童文学作家	吉富	多美
横浜市PTA連絡協議会会長	秋好	直樹
横浜市立中学校人権教育推進協議会会長	金澤	眞澄
横浜市人権教育研究会会長	梅田	比奈子
教育委員会事務局健康教育・人権教育担当部長	前田	崇司
市民局人権担当理事	斉田	裕史

●協賛

横浜DeNAベイスターズ

横浜F・マリノス

横浜FC

横浜ビー・コルセアーズ

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市内における人権啓発活動を、関係機関の協力のもとに総合的かつ効果的に推進するために平成12年9月に設立。

構成：横浜市・横浜人権擁護委員協議会・

横浜市人権擁護委員会・横浜地方事務局

令和元年度 全国中学生人権作文コンテスト 横浜市大会作文集

令和元年11月

横浜市市民局人権課 TEL 045(671)2718

横浜市教育委員会事務局

人権教育・児童生徒課 TEL 045(671)3724